

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「〈ココロの休憩所〉 ハーブがつなぐ絆」

鶴来中学校一年

金谷
かね
や

光優
み
ゆ

1 愛花

私は愛花。（あいか）ちょっと頭いい中2の女子。「おはよ！昨日のアニメ見た？あれめつちや面白かったよね！」こつちは優花。めつちや元気なスポーツ得意すぎる女子。私たちはこの世で一番といつてもいくらい仲が良かつた。好きなアニメもゲームも食べ物も一緒。知り合つたのは中学に入つてからだけど、共通点が多いことが分かつてすぐに意気投合した。周りからも「愛花と優花ってホントに仲いいよね。そんな友達あこがれる！」「いつも一緒にいて飽きないって感じるよ。うらやましいな～」って言われるくらいだ。

私たちはもうすぐ「地域の伝統」をテーマに社会科見学に行くことになっている。今日は自分たちの班のメンバーと一緒に、その地区をどのように回るか足取りを話し合う時間だ。私の班には優花と海斗（かいと）、陸（りく）、麻希（まき）がいる。「みんなが納得するような結論になるようによく話し合つてください。結論が今日決まらなくとも、来週の月曜日もあるので心配しないでくださいね。それは始めてください。」先生の声で話し合いが始まつた。真っ先に意見を言つたのは優花だつた。「やっぱり安全第一だし、みんなと一緒に順番に回つていくのがいいと思う！」「たしかに班で來てるんだから誰か一人がいなくなつたりしたら困るもんね。僕は賛成だよ。」陸も同じような意見のようだ。「でも、それだとあまり情報が集まらないんじゃないかな？時間もあまりないし、全部回れるかはわからないよ。」と海斗が言つた。「確かにそうだよね。どうすればいいかな？」麻希も同じようだ。その時私はいいアイデアを思い付いた。「だつたらさ、5人もいるんなら一人一人手分けしていけばいいんじゃない？そうすれば効率よく回れるよ。」「そうだけどさ、1人だつたら危なくなない？危険だからやめといたほうがいいと思うよ！」優花は納得がいかないみたいだ。「でも、全員で同じとこ回つてたらやつぱり時間足りないよ。それだつたら別れたほうがより勉強になるんじゃない？集合

場所と時間さえ決めればいいんだから。」「なんで？じゃあこの中の誰かがいなくなつてもいいの？そんなわけないよね！？やつぱりおかしいよ！」「ちょっと、一旦落ち着けつて！」立ち上がつた優花を海斗が止めた。「っ！大体さ、愛花自分の意見押し通そうとしてるんでしょ！」「そんなこと言つたつてそつちこそ声荒げてさ、一緒じゃないの？」「なんで否定から入るのさ！やめてよ！やつぱりほんとは嫌いだつたんでしょう！」「そうじやなくてさ。ただ意見に対して言つただけなのになんで私自身まで言つてくるの？ちょっと落ち着いてよ。」だんだんヒートアップしていく私たちを周りは止められなくなつていた。「はいそこまでです。また次もあるので自分の意見をもう一度よく考えて次の話し合いに生かしてください。」気づいたら終わつた。私たちの班の間には、なんだか嫌な空気が流れていた。

私は家に帰つて反省した。確かに言い過ぎたかもしれない。なんであそこまで言つちゃつたんだろう。ほんとにダメだな私。いやでも向こうが声荒げたのが悪いのかな。そんなことないよね。自分が悪いんだよね。でもこれからどうすればいいんだろう。いろんな考えが頭の中をぐるぐる回つてた。「ごはんできたよー。」お母さんの声だ。今日の夕食は、鮭の塩焼き、サラダと漬物、みそ汁とご飯だ。いつもなら割と早めに食べ終わるのに、今日は箸が進まなかつた。お母さんも心配して「大丈夫？何かあつたの？」って言つてきた。「ううん。別に何もないよ。ちょっと食欲なくしちゃつただけだから。」って言つて、自分にも言い聞かせて、無理やり箸を進めた。宿題してる時もずっと頭の中がぐるぐるしてた。なんか頭が痛くなつてきた気もした。とつとつ終わらせて早く寝よ。寝たら嫌な気持ちも忘れるよね。そう思つていつもより早く寝た。

朝、すごく目覚めが悪かつた。なんか昨日より頭のぐるぐるが激しい気がした。学校の支度を済ませた後、とてつもなく重い自分の心を抱えながら嫌な気分で学校に行つた。学校に着くころにはもう半分く

らいの人がクラスにいた。優花もいたけど、話しかけられる気分ではなかつた。というか、なんて言つたらいいか分からなかつた。なんだかすごく氣まずい。「愛花おはよう。やつぱり昨日のこと落ち込んでるよね。」麻希が言つてきた。全くもつてその通りだ。「大丈夫だつて。愛花ならきつとできるよ。一回話しかけてみれば楽になると思うよ。」って言つてたけど、なんか気まずすぎて無理だつた。授業終わつた後の部活でも、帰り道でもずつと考へてた。どうやつたら仲直りできるんだろう。よく考へてみればあの日優花は言い過ぎつて思うところもあつたけど、客観的に思つたことを言つてた。別の面で思つたことを正直に言つてくれた。それなのに私は全部とがらせて跳ね返した。こんなんじや誰のことも受け入れられないや。どうやつたらこれが直るんだろうな。はあ。でも、明日休みだし。早く寝ちゃおうかな。そう思つて今日も眠りについた。

次の日私は気分転換も兼ねておつかいに商店街へ来た。いつもここにおつかいを頼まれている。お菓子買つたりもしてたけど、今はそんな気分じやない。おつかいを済ませて歩いてたらある店が目に入つた。見たこともない店だつた。**「ココロの休憩所**』という看板がある。ここ、空き地だつた気がするのにな。「あら、どうしたの? 何か嫌なことがあつたみたいだけど。」店主に見える若い女性の人が話しかけてきた。なんで嫌なことがあつたつて分かるんだろう。「まあ、とにかく入つて。」「あ、はい。」中はすごくきれいなカフェだつた。他と違うのは1人か2人用つて思うぐらゐこじんまりしているのと、緑が多いなつて感じることだ。「私は心愛(ここな)。ここはカフェでもあり、心のお悩み相談所なの。私、悩んだりして人の心が少しでも軽くなつたらいなと思つてここに**「ココロの休憩所**』を開いたの。」「そうなんですね。」「ところであなたは? よかつたら話聞かせて。」「あ、私は愛花つて言います。えつと…」私はあの日の出来事をすべて話した。なんか驚くぐらい正直な気持ちがすらすらと出てきた。「うんう

ん。それで対立しちゃつたんだね。たしかに、友達の中でも意見が分かれて喧嘩になるなんてことはあるよね。」すごく優しい感じで、否定的な感じがしなかつた。「ちょっと待つててね。」そういうと心愛さんは奥のほうのキッチンへ行つた。しばらくすると戻つて来て、私にハーブティーを差し出してきた。強めの香りを感じた。甘めの奥に苦みがあつて上品に感じた。「これはラベンダー。リラックス効果があつて、落ち着きたいときにぴつたりなの。」「なるほど。」ちょうどいいなつて思つた。もう一口飲んでみた。「もし、意見が分かれたりして対立したときは、一回立ち止まつて考へてみるの。向こうはどんなことを思つてああ言つたんだろうな、自分は今何を伝えたいんだろう。頭の中をフォルダ分けするみたいに整理してみるの。そうしたら、自分なりの結論が見えてくると思うよ。」自分なりの結論か。今は少し気持ちが落ち着いた気がするし、家で一人になつて考へてみよう。なんだか次への道が開いたみたいで、金属の塊みたいに重かつた心が嘘みたいに軽くなつた。「ありがとうございました。すごくすつきりしました。」「よかつた。また困つたりしたらこのこと思い出してみてね。」「はい!」私は帰り道でこれからなんて言おうかなつて考へながら歩いていた。

月曜日、学校に着くともう優花がいた。そしてすぐに「あの時はごめん!」「あ。」つてシンクロした。なんか面白くて笑いがこみあげてきた。ひとしきり笑つた後、私は言つた。「あの時ちよつと責めるような言い方してごめん。確かにあれは完全に押し通そうとしてたよね。優花は自分の意見をはつきり言つてくれただけなのに。ごめんね。」「こつちだつて! 声荒げちゃつたし。それこそ自分も強く言います。話し合いの前にめつちや考へて思いついたアイデアだからつてついうれしくなつて、自分勝手に進めてた。感情的になつちゃつた。ごめん。」お互い言いたいことは言い合えた。「私たちなんでこんな急にすんなり言えたんだろ。前は全然言えなかつたのに。」「それつ

てさ、二人とも〈ココロの休憩所〉に行つたからじゃない?」「え? 何で知つてるの?」「私愛花のことあの商店街で見たんだよね。」そう言つて優花は自分のその時の気持ちや出来事を話してくれた。

2 優花

なんで自分つていつもこうなんだろう。これだから自分が嫌いなんだ。すぐ感情任せになつてあーだこーだつて言つちやうし。あんなこと言わなければよかつた。でもあいつた愛花も悪いのかな。あーもうわかるない。なんにもわかるない。誰か助けてよ。頭痛くなつてきた。お姉ちゃんも言つてたな。「あんたよくちよつとイラついたらすぐ感情的になつて言葉に出すよね。まあそうやつてストレスを逃がしてるんだと思うから、優花なりの方法なのはわかるよ。でも、その方法やと人によつては傷ついたりするからちよつと気をつけんなん。落ち着けー! つて自分に言い聞かせて家に帰つてから私に愚痴言うとかでもいいから。愛花ちゃんもそのことわかつて傷つけないように明るく話してくれる。最高の友達や。大事にせんなんよ?」この言葉が自分にはちょっと刺さつてた。でもすぐ忘れてまたこうなつちやつた。どうしようもないな。そもそも落ち着け! つて言つたつて落ち着くようなもんじやなかつたし。ほんとにどうすればいいんだろう。ただいまども言わずに、ゲームも何にもしないで部屋にこもつてる自分で見て、お姉ちゃんが「大丈夫そ?なんかあつたの?話聞くよ?」つて言つてきた。まあさすがに心配するよね。いつも元気なのにこのテンションの下がり方だつたら。「なんもない。」つて適当に返した。「ほんとに?なんかあつたらほんとに相談してや?」めつちや心配してたけど、宿題はやらなきやだからしたし、最低限のことだけして寝た。寝て忘れたかったけど、頭の中ではずつともやもやが広がつてた。気づいたら朝だつた。もやもやは昨日より大きくなつてて、すんごく疲れてた。こんなにしんどい朝は今までになかつた。学校にはいつ

もよりすつごく早く着いた。何なら一番乗りだつた。なんで早く来ちゃつたんだろうなつて思いつつも教室にいた。しばらくしてから愛花も来た。けどあいさつする氣にもなれなかつた。すつごく気まずかつた。「おはよー優花。やつぱり昨日のことと後悔とかしてるとかしてるよね。」麻希だつた。確かにそうだけど、もうどうすればいいかわかんない。「大丈夫だよ。二人なら仲直りできるつて。」そんなこと言つてたけどほんとかな。全然仲直りできる氣がしない。自分にできる氣がしない。何すればいいか分かんない。何もする氣起きないし、何もわかんない。家帰つてからも昨日みたいに何も手を付けずにずっと部屋にこもつてた。いつもなら「やつたー! 明日休みだ! 何しようかな♪」つてめっちゃ浮かれてるんだけど。お姉ちゃんもまた心配して「ほんとに大丈夫? 風邪でも引いた?」つて言つてきた。「別に今日もちよつとだけ嫌なことあつただけ。軽いことだから。」つて適当にやり過ごした。何もわかんない。どうすればいいんだろ。なんて言つたら許してくれれるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。不安ともやもやが混ざつて重くなつて自分を押しつぶしてくるかな。思つて今日も早めに寝た。

次の日、お姉ちゃんに「あんたなんか変だよ?なんか沈むことでもあつた? 気分転換に商店街とかどつか出かけてきたら?」つて言われたから近くの商店街へ來た。レストランで料理食べて適当に過ごしてると外に愛花がいた。なんか知らない建物に入つてつた。そこには〈ココロの休憩所〉つて書いてあつた。しばらくすると愛花が出てきてすんごい晴れやかな顔で帰つてつた。自分もあそこに行つたらもやもやがなくなるかなつて思つて、レストランの会計を済ました。店に近づくと中にいた女性の人が「あら、また困つてることがあるのね。どうしたの? よかつたら話聞くよ。」つて言つてきた。「どうぞ入つて。」「おじゃまします。」中はすつごくきれいだつた。緑が多いなつて思つた。「私は心愛。悩んだりしてる人の心が少しでも軽くなつたらいいなど

思つてカフェを開いたの。」「なるほど。えっと…自分のも相談していますか？」「もちろんいいよ。何か教えて。」自分はあの日のこと、全部話した。あいづちうつてくれて、話しやすかつた。そのせいかどんどん話してた。「なるほどね。声荒げちゃったのか。でも、つい感情的になつちやうことつてあるよね。」心愛さんは否定しなかつた。自分で自分のこと嫌になつてたからすぐうれしくて、すごく心の広い人だなつて思つた。「ちょっと待つて。」そう言うと、奥のほうのキッチンへ行つた。ちょっとしたら戻つてきて、私に黄色っぽい紅茶みたいなのを出してくれた。「これって何ですか？」「これはハーブティー。カモミールだよ。カモミールはイライラを抑えたり、リラックスさせる効果があるんだ。」今の自分にぴったりだなつて思つた。「いただきます。」カモミールティーはお花っぽいフローラルな香りとほのかな甘みがした。「もし自分が感情的になつたり、なりかけたときは一回心をなだめて落ち着かせよう。それで自分の気持ちを正直に言おう。言い方によつて感じ方も変わつてくる。相手に向き合えるように優しい口調で話すと相手も納得してくれると思うよ。」あの時のお姉ちゃんの言葉と似ている。確かにそうすればいいのはわかる。でも…。「もし、どうやつて落ち着かせたらいいかわからないつて時があつたら、深呼吸しようつて思えばいいんだよ。具体的にこんな行動するだつたらわかりやすいからね。」確かに深呼吸ならでける気がする。まずは深呼吸、まずは深呼吸…。これに慣れてけば簡単に落ち着かせられる気がしてきた。「深呼吸したり、ここのこと思い出したりして、自分の心を落ち着かせるの。そしたら、あとは整理する。頭の中がごちやごちやのままだつたら、何にも分からなくなつちゃうからね。その中から自分の言いたいことを考えていけばいいんだよ。」なんか一気に道が開けた気がした。心愛さんすごつてなつた。頭の中がごちやごちやのままだつたらそりやわかんないよね。深呼吸する、整理する、結論を出すの3ステップ。こうやつて覚えれば対処できる

のか。「ありがとうございました。おかげでこれからうまくいけそうな気がします！」「そつか。よかつた。また思い出してね。」「はい！」「優花ちゃん、愛花ちゃんと絶対仲直りしてね。」「します！」そう言ってここを立ち去つた。でも不思議なことがちょっとあつた。なんで名前知つてたんだろう？愛花が言つてたからかな？なんか心読まれてるみたいだなつてちょっとだけ思つた。でもここに来てよかつた。もやはもう消えていた。

「つてことがあつたんだよね。」「なんかめっちゃ私と似てるじやん！てかほぼ一緒なんだけど。「ほんとに！？やつぱなんか謎の運命みたいなのがあるのかな？」「ほんとにそうみたいだよね。」気づいたらまたいつも通りに戻つてた。やっぱり麻希の言うとおりだつた。二人でまた笑いあつた。

2回目の社会科見学の授業の時間になつた。その時に二人で謝つた。「あの時は本当にごめん。一人とも自分勝手なことしてた。今はもう話し合えて落ち着いたけど、本当に迷惑かけてごめん。」「全然いいよ。対立することもたまにはあるよ。それに、仲直りできたならよかつた。」みんなそう言つてくれた。「それで、話戻すけど回り方、二人の意見いいとこどりすればいいんじゃない？」麻希が言つた。「どうやつて？」「分かれるのを複数人にするんだよ。ここは5人だから3人と2人で分けねばいいの。こうすれば複数だから優花のいう安全性も少しは取れる。そのうえ効率もよくなる。」「めっちゃいいじゃん！」「2人ともすっかりいつもの調子に戻つてるね。」この日の話し合いはスムーズに進んだ。「はい、ここまでです。皆さんとても有意義な話し合いにできることでしょ。実際に見学に行くのは来週の木曜日なのでみんなでもう一度確認しますから、覚えておいてくださいね。」先生の声で授業が終わつた。前と違つてみんな笑顔だつた。

前と変わつたのは二人ともよく考えて行動できるようになつたことだ。対立しそうになつた時はお互に立ち止まつて考えてる。だか

ら間が生まれる。その時に面白くなつて笑つたりすることもあつたけど、よりいい方向に進むようになつた。前より成長できたなつて思えるようになつた。「そうだ！心愛さんにお礼言いに行かない？」「贊成！それじゃ今日の放課後、一緒に行こ！」

実際にあの商店街に行つた。でも、あの場所に「ココロの休憩所」はなかつた。元の空き地に戻つてた。「あれ？おかしいな。あれが幻覚だつたはずがないのに。」「不思議なこともあるもんだね。」「そうだ！ないなら自分たちでやればいいんだ！」「なるほど。それめっちゃいいじやん！」「じゃあ、将来2人で「ココロの休憩所」やろうよ！約束だからね！」「うん。絶対。」

あれから10年後、私たちは商店街のあの場所に「ココロの休憩所」を開いていた。毎日いろんな人が相談に来る。私達はいつもその人たちの悩みとかを聞いて、それに合つたハーブティーと共にアドバイスをしている。中にはハーブティーとか飲みに来るだけの目的で来てる人もいた。あの日の私達みたいに友達関係で困つている学生も来た。「もし、対立しちゃつたときは、一回落ち着いて、頭の中を整理してみるんだ。そして言いたいことを見つけ出す。正直にこうだからこんなことになつたんだって言つた方が向こうも納得してくれるよ。」つて、こんな風にアドバイスしてる。自分たちがあの日心愛さんに言われたみたいに。そしてこれは自分たちの仲の良さの秘訣でもある。この考え方を大事にしてきたから、今でも信頼できる関係にあるんだもん。相談してくれた学生も「ありがとうございました！すごく心が軽くなりました！」つて言つてくれる。こうやつてお客様が笑顔になつてくれると自分たちもうれしくて、笑顔になる。

いつの間にかこの場所は大人気になつていて、この商店街のシンボル的存在にもなつた。テレビがきて、「日本の中でも笑顔あふれる商店街」として取材も受けた。「なんか気づいたら忙しくなつちゃつたね。」「今日ほどの人が来るかな。」「また、いろんな人と話したい

ね！」「じゃ、今日も準備しようか。」「うん！」なんてことを話しながら、今日もハーブティーの用意を始めた。

